

長谷川 千代子〔宗教学（文学研究科）〕

中国における国民形成と少数民族  
—雲南省徳宏タイ族の日常実践をめぐって—

本論文は、中国の少数民族である雲南省徳宏タイ族の儀礼習俗を中心に、かれらの生活世界と国家体制の交渉過程を明らかにしようとしたものである。その考察の新しさは、第一に社会主義体制下での長期の現地調査にもとづく詳細な民族誌であること、第二に限られた時代幅ではあるが1940年代以降の国家政策と地域文化・民族文化との歴史的ダイナミズムを描く歴史人類学的な試みであること、第三に文化・民族・宗教・迷信・風俗慣習等の官製カテゴリーに回収されない生活実践の実証的研究によって、構造と実践、言葉と行為をめぐる現今の理論的課題に新たな展望を開こうとしている点にある。

第一章は、近代中国の国民形成と民族政策等にかかわる人類学的な主題を整理し、少数民族の日常生活から国家レベルの文化の政治を仰ぎみる著者の視角を素描している。

第二章では、タイ族のエスニック・シンボルとされる水かけ祭を対象に、「民族伝統文化」という中国政府の公式見解を歴史的にあとづけ、そうした公的な理念と徳宏タイ族の実践との適合と齟齬のしくみを検証している。

第三章・第四章では、積徳行であるポイ・パラ儀礼を中心に仏教的な実践に着目し、それらが民族にふさわしい「伝統文化」にも、排斥されるべき「迷信」にも回収されず、次善の「宗教」カテゴリーに分類されるしくみを検証している。と同時に、人々の実践する仏の教えが現実にはこれら官製カテゴリーをおのずと横断することを明らかにしている。

第五章では、地域の守護霊祭祀や墓石習俗などをとりあげ、「封建迷信」というマイナスの価値づけによって無視されがちな状況が、かえってこれらを舞台に、近代的発想とは異質な異民族・異文化の共存を可能にしていることを説得的に描いている。

第六章はこれらの事例研究に一貫している、少数者の生活世界がはらむ生きる力の可能性をあらためて提言するまとめの章である。より大きな外部のシステムに対する抵抗でも逃避でもなく、権力を撓めながらたくみに受容する実践的な知恵のありかたが、それを研究する立場からの理論的展望をふくめて検討されている。

以上のように、本論文は従来十分な現地調査のなかった少数民族を対象とし、小さな習俗行為とより大きなシステムとのかかわりを描く人類学的技法を駆使することで現代世界における少数者の生き方とその可能性を詳細に明らかにしている。と同時に言葉と行為、構造と実践をめぐる古典的問題に理論的な一石を投じており、これらの点でこれまでの学界における研究の水準を一步進めるものであるといえる。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認めるものである。